



7月10日(土)開催のふおんて寄席「柳家喬太郎独演会」。毎回多くのご来場者で賑わいます。
この度は落語をより身近に楽しんでいただくために『寄席入門』をお届けします。



よせ 寄席

落語を中心に様々な演芸が演じられる場所を寄席(よせ)といいます。元々は「寄せ場」「人寄せ場」などと呼ばれていました。江戸中期・寛政年間(18世紀末)に誕生し、幕末には江戸市中に数百件を数えましたが、現在は東京4か所と大阪などに3か所ほど、「定席」(常設の寄席)が、年中ほぼ休みなく営業しています。寄席で演じられるのは落語だけではなく、講談、浪曲、曲芸、紙切り、手品、漫才、コントなど、バラエティーに富んだ番組(プログラム)になっています。前座(若手)の落語から始まり、紙切りや漫才などの色物と呼ばれる演芸と、二ツ目(中堅)の落語がテンポよく進んでいき、最後に真打(ベテラン)がその日のトリを努めます。

らくご 落語

一人で複数の人を演じながらお話が進行する笑いの芸。噺(はなし)の種類は小噺から長編まで含めれば、演目数は400~500席あると言われています。大別すると、落とし噺(オチのある面白いネタ)と、人情噺(人間の喜怒哀楽をテーマにしみじみ聞かせるネタ)の2種類があります。また、噺のスケールや演者の格によって「前座噺」「中ネタ」「トリネタ」と分けることもできます。使われる小道具は扇子と手拭いの2つだけです。これらを色々なものに見立て落語の演出効果として利用します。

落語の原点と考えられるのは、室町時代・戦国時代に武将に仕えた「伽衆(おとぎしゅう)」という存在です。彼等は娯楽の少なかった当時、世情などを機知に富んだ巧みな話術で、おもしろおかしく人々に聞かせていました。その後、戦乱時代には大きな発展がみられず、天下が治まる江戸時代には様々な芸能を育む機運が熟し、落語もその一つとして勃興します。そして江戸末期から明治時代において三遊亭円朝がそれまでの落語を集大成し、近代落語の基礎を作り上げます。それまでの変遷と同様、現代においても落語はその時代の風俗、世情を吸収し、幅広い層に親しまれる大衆芸能として日本人の心に生きつづいています。

えど らくご かみがたらくご 江戸落語と上方落語

東京を中心に発展した江戸落語は商家や武家の座敷に呼ばれて演じるという「座敷噺」の形で発達したため、じっくりと聴かせる噺が多く、大阪など関西圏を中心に発展した上方落語(かみがたらくご)は盛り場の辻で、行き交う人を呼び止めて演じた「辻噺」を起源とするため、にぎやかな噺が中心になります。上方落語は演出も派手で、演者の前に見台や膝隠しなどの道具を置き、小拍子を叩きながら演じることもあります。

こてん らくご ひんさくらくご 古典落語と新作落語

戦後始まった落語の分け方で、江戸から明治の風俗を背景に、大正の初め頃までに作られ、代々磨かれてきたものを「古典落語」、大正中期中以降に作られ、作者がはっきりわかるものを「新作落語」と呼びます。新作落語からは、戦前に柳家金語楼、戦後には三代目三遊亭円歌という人気者が誕生。近年では三遊亭円丈の「実験落語」、上方では桂文枝の「創作落語」などが知られており、続く中堅・若手からも沢山の新作の名手たちが現れています。

かひきゅう 階級

江戸落語界には、「真打・二ツ目・前座」という三つの階級がありますが、上方には明確な区分けがありません。

- 前座(3~5年): 雑多な楽屋仕事をこなしながら、落語家のイロハを覚えていく修業期間
- 二ツ目(10年前後): 羽織の着用や専用の出囃子を許され、楽屋仕事からは解放される。一人前の落語家として扱われるが、真打昇進に備え、勉強会を開いてネタを増やすなどの修業が続く。
- 真打: 「師匠」と呼ばれ、晴れて寄席のトリをとることができる。弟子を取ることもできる。ここからが落語家としての本当の出発点であり、若手、中堅、幹部クラスを含め数百人の真打と高座で芸を競う日々が生涯続くことになる。

とり

寄席番組の最後の出番のこと。この役割を勤めることを「トリをとる」といいます。昔、主任格の演者が、席亭(寄席の経営者)からその日のギャラを全部受け取り、他の出演者に分配していたことから「取り=トリ」となったといわれています。興行の責任者として芸の力と集客力が問われるため、落語家にとっては試練であり、名誉でもあります。

いろもの 色物

寄席で演じられる落語や講談、浪曲以外の演芸の総称。落語のような伝統芸とは一線を画し、それぞれが独自の得意芸をみ出す「一人一芸」の要素が強く、分かりやすく肩の張らない芸の数々は、寄席興行には欠かせない存在です。諸説ありますが、「落語や講談と区別するため、出番表に赤字で記した」「番組の彩りになるから」などが語源と言われています。

げざ おんがく 下座音楽

お囃子の三味線や太鼓など、寄席のBGM全般の総称。三味線・太鼓・笛・鉦(かね)などで構成されています。内容は演者が登場する際の入場BGM「出囃子」はもちろん、開場時や終演時に叩かれる、「一番太鼓」「二番太鼓」「追い出し太鼓」や、落語の噺の中で、噺の情景などを表し、盛り上げる「ハメモノ」、太神楽や紙切りの演目中のBGMなど、多岐にわたります。

いかがでしたか。

以上のようなことを知って
ご来場いただければより落語が
身近になり、楽しめるのでは…
ご来場お待ちしております。